

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

藤代泰三著

『キリスト教史』について

(日本YMCA同盟出版部
B6判七〇四頁 三、七〇〇円)

藤代泰三教授が四半世紀の歳月をかけて上梓された大著『キリスト教史』(日本YMCA同盟出版部)は、かつて同志社大学神学部が歴史神学の分野において常に学界をリードしてきた故魚木忠一教授と故有賀鉄太郎教授の働きを髣髴させるものがある。

本書は、魚木、有賀両先生の実証的研究と精神的歴史研究の学風に加えて、藤代

教授に固有の自由主義神学のなかに敬虔主義信仰を有した自己を学問する前提として、いることにおいて傑出しており、歴史研究の方法においてもディルタイの精神科学の理解をさらに深め広げたものとなっている。著者自身が、自からの信仰を教育者としての働きのなかで厳しく問いつづけ、歴史の時間に刻み込まれた個的存在における魂の所在を共同性のなかにおいて、あるいは社会史のなかにおいても忘れることのできないものとして把握し、キリスト教精神史としての歴史認識に立ち、纏められたものである。

教育者としての自己と学問人としての自己を信仰において一体化させ、この困難な四半世紀の時間と正面から対し執筆されたその営為は、魚木、有賀両先生の同志社大学における学問的継承者としての面目躍如たるものがある。

教育、研究、信仰が各々分解した、いわば自己分裂の状態の「教育者」「研究者」「信仰者」の多い昨今、藤代教授の如き、学問の方法の前提としての自己を前面に出し、著述の原動力とし歴史を考察する手法

をとられた根源的思考には大きな意味があるといわねばならない。

本書は、イエスの福音がその共同体を通してどのように個的存在にかかわり合いを持ちえたのか、又イエスの福音はその共同体によって社会のなかでどのように働きたのか、という全体史的課題を持ち、初代教会から現代われわれが共に存在している時代までを縦軸とし、東西ヨーロッパ、ソ連、アジア(もちろん日本も含む)、アフリカ、オセアニアの各地域をできるかぎり視界に入れ、それを横軸とする時間と空間の構成がきめ細かに出来ている。またとくにわれわれ日本人の複合宗教とでも呼ばれるべき精神的伝統をもつてして、将来は、欧米人によつては理解把握されなかった主イエス・キリストの福音の深さや広がりが見え明らかなにされるであろう、との展望が述べられている。本書は単に研究書にとどまらず、精神史を舞台にした著者から読者に宛られた「牧会書簡」ということができよう。基督教哲学会(大山寛理事長)は、本書の成果に対し学会賞を授与し、その榮譽をたたえた。このような背景になる名著の誕

生は、ひとつの福音の出来事ともいふべきことであり、誠に喜びにたえない。

(野田茂徳 筑波大学助教授 昭和三十八年大学神学部卒)

児玉実用名誉教授の

最近の三冊の詩集

によせて

詩人を詩作に駆りたてるものは、ときとして、凄絶目をおおいたくなるような体験である、という場合がある。近くは石原吉郎がそうであった。原民喜の「夏の花」と一連の詩、高村光太郎の「智恵子抄」などがそうで、堀辰雄の「風立ちぬ」などもあげてよいかもしれず、数えれば優に十指に余る、いや、数えきれぬといふべきか。

奥様をガンで亡くされた直後の、児玉実用先生の詩集『哀歌』は、痛ましい体験の渦中で書かれた作品を集めたもので、拝読しながら、わたしは息苦しかった。詩人は、母を慕う幼児のように裸であった。

逝ってはいけない

妻よ体温があるならば
いつまでも今のままだってばくは耐える
息を絶たないでくれ

どんなに厳しい冬だってばくは耐える
冬のままでいい

(「ユリカモメの妻」部分)

わたしは『哀歌』発行の直前に、拙文「児玉実用の詩」を書いて、旅に出られることをおすすめた。児玉先生は、詩人として出発された当初から旅の詩人であった。旅の途上で、モチーフも素材もつかむことが多い詩人であった。

拙文には関係なく、ユリカモメが鴨川に飛来し、雪が舞う季節（それは奥様を亡くされた季節であった）になると、詩人は候鳥のように日本を発たれる。日本の冬が辛いのだ。『冬の旅』（昭和五四年一月）はそうした旅先のもので、「妻への手紙」と副題がある。アメリカ在住のお嬢さんに出会われ、「通りすがりの田舎のダイナー（食堂）で、娘とコーヒを飲みながら、妻の思い出を語って悲しんだ間だけが、この日一番の救いであった」（「救い」部分）とい

う一節が、この詩集の発想の様相と、この書の性格を端的に語っている。

そして、昭和五三年冬から翌年一月にかけて、カリブ海、西印度諸島を旅された詩人は、『ああ 貿易風』（五四年一〇月）を上梓された。明るいカリブと女体のイメージがオーバー・ラップする「満潮」など、モダニズムの流れをくむ詩人ならではの爽やかな佳品である。凄絶な体験を経た孤独な魂の軌跡が、三カ年の三冊の詩集を重ねてみると、あざやかに看取される。天上の奥様もやっと、ほほえみをうかべておられるのではないか。

大海亀が
卵を埋める温かい砂浜の
どこを掘っても
失った白い器は出てこなかった

(「満潮」第一連)

わたしは折る。貿易風よ、詩人の想像力の翼に吹け。詩よ、痛手を負った魂の救いであれ！

(河野仁昭 社史史料編集所事務主任)